



TITLE:

表紙・編集後記・目次

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙・編集後記・目次. 英文学評論 1985, 50

ISSUE DATE:

1985-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/135174>

RIGHT:

英文学評論

第 I 集 記念号

<i>and</i> 考	佐々部 英 男
意味の分化と統合	
——チョーサーの表現法について——	六反田 収
『ハムレット』冒頭、鐘の音	加 藤 行 夫
『あらし』のあと	桜 井 正一郎
『イル・ペンセローソー』とシェイクスピアの悲劇	酒 井 幸 三
恣意の空間と摂理の空間（その五）	
——『序曲』の鳥の巣掠りの少年・覚え書き 四——	松 下 千 吉
あるパーネルの挽歌	佐 野 哲 郎
『エマーのただ一度の嫉妬』と能の劇作法	長谷川 年 光
『部屋』の構造	依 田 義 丸
『レッドバーン——初航海の記』再考	福 岡 和 子
生と死に対する衝動の葛藤	
——『エレクトラには喪服が似合う』試論——	小 畠 啓 邦
ウォレス・ステューヴンズ「内なる恋人の最後の独白」	
解明の試み	渡 辺 久 義
シェイクスピア劇とローマ史の人物像（Ⅶ）	
——プルタルコスを中心に——	木 村 輝 平
A Brave New World After All?	David Hale
Ezra Pound ed. "Fenollosa on the Noh" as It was	Akiko Murakata
総 目 次（第 I 集～第 XLIX 集）	

京都大学教養部英語教室

目次

and考.....	佐々部 英男.....	(一)
意味の分化と統合——チョーサーの表現法について——	六反田 収.....	(二二)
『ハムレット』冒頭、鐘の音——シェイクスピア劇のせりふと書き——	加藤 行 夫.....	(四〇)
『あらし』のあと——オーデン作『海と鏡』注解——	桜井 正一郎.....	(五六)
『イル・ペンセローソー』とシェイクスピアの悲劇.....	酒井 幸三.....	(七八)
恣意の空間と摂理の空間(その五)		
——『序曲』(第一巻)の鳥の巢掠りの少年・覚え書き(四)——	松下 千吉.....	(一〇一)
あるパーネル挽歌——イエイツと一八四八年——	佐野 哲郎.....	(二七)
イエイツの『エマーのただ一度の嫉妬』と能の劇作法.....	長谷川 年 光.....	(一四五)
『部屋』の構造——シェイクスピア喜劇との関連を中心に——	依田 義 丸.....	(一六八)
『レッドバーン——初航海の記』再考——リヴァプール部分を中心に——	福岡 和 子.....	(一九一)
生と死に対する衝動の葛藤——『エレクトラには喪服が似合う』試論——	小島 啓 邦.....	(二〇七)
ウォレス・ステイヴンズ「内なる恋人の最後の独白」解明の試み.....	渡 辺 久 義.....	(二二四)
総目次 第一集〜第四十九集.....		(二四一)
シェイクスピア劇とローマ史の人物像——プルタルコスを中心に——(VII)		
『コリオレーナス』論(その一)コリオラスとその時代.....	木村 輝 平.....	(一)
A Brave New World After All?		
——'Nature' in the Work of Some Contemporary Poets——.....	David Hale.....	(15)
Ezra Pound ed. "Fenollosa on the Noh" as It was:		
Lecture V. No. Washington, 12 March, 1903.	Akiko Murakata.....	(45)

『英文学評論』総目次 第一集〜第四十九集（昭和二十九年三月〜五十八年十二月）

第一集（昭和二十九年三月）

- ミルトンの芸術性について
 バトラーとドライデン
 シャフツベリの思想の二重性について
 十八世紀の詩論
 ヘンリ・フィールディングの小説について
 エマソンの文体
 イマジズム
 『楡の樹蔭の欲情』断想
 クリストファ・フライの詩劇
 視覚的表現と分析的表現
 Perfect の主流
 On the Pronunciation of "Annusee"
 and Secondary Stress in General
 書評を兼ねて
 新刊紹介
 第二集（昭和三十年三月）
 ウィリアムズと『失楽園』の構成
 フィールディングとホガース

宮西光雄 山村武雄 川田周雄 村上至孝 飯沼馨 中野正順 大浦幸男 山内邦臣 高谷毅 池田義一郎 松木泉 小林象三 深瀬基寛 宮西光雄 飯沼馨

十八世紀の詩論
 劇的独白

- ホプキンズとブリッヂェズ
 人としてのT・S・エリオット
 ノーマン・メーラーの『裸者と死者』
 象徴の後退——言語と実在
 アイルランドの英語について
 Prose and Verse
 或る書友への手紙
 新刊紹介

村上至孝 中野正順 山村武雄 角倉康夫 山内邦臣 池田義一郎 松木泉 小林象三 深瀬基寛

第三集（昭和三十一年三月）

- アイルランド演劇の創始者たち
 ポープと剽窃
 ドルベンの詩をめぐる考察
 イェイツの『最終詩集』について
 ロバート・フロストの対話詩
 天才と女神
 Sentence Stress and Prose Rhythm

山本修二 川田周雄 山村武雄 大浦幸男 村上至孝 中野正順 小林象三

第四集（昭和三十三年三月）

三つの演劇用語について
現代におけるミルトン再評価
シェリ——『世俗の凱旋』——
理想の批評家——アーヴィング・バビットの場合

山本修二
宮西光雄
森清

E・M・フォースターにおける野性的人物
島文次郎先生の思い出

角倉康夫
村上至孝
深瀬基寛

第五集（昭和三十三年三月）

故郷の喪失

「他者」の思想

アーヴィング・バビットと大学教育

イエイツと老齡の問題

『偉大なる神ブラウン』とオニールのなるもの

『ドイッチュラント号の難破』を通して見たホプキンスの

詩的本質

深瀬基寛
中野正順
角倉康夫
大浦幸男
山内邦臣
山村武雄

第六集（昭和三十四年三月）

悦しき知識

ヤングの『夜の随想』

ブラウンニングの詩心

孤塔の詩人イエイツ

深瀬基寛
村上至孝
中野正順
大浦幸男

ユージン・オニールの『夜への長い旅路』
古典と教育

アーノルドとアメリカ

第七集（昭和三十五年三月）

ドライデンの詩的展開

ハーディの短詩をめぐって

孤塔の詩人イエイツ（その二）

D・H・ローレンス——問題と応答

Literature and Democracy

Roger G. Matthews

第八集（昭和三十六年二月）

『マルタ島のユダヤ人』試論

——主人公バラバスの変貌——

ドライデンの詩的展開

ウィリアム・ブレイク——『虎』——

孤塔の詩人イエイツ（その三）

第九集（昭和三十六年三月）

『ジョナサン・ワイルド』の周辺(1)

孤塔の詩人イエイツ（その四）

後期エリオットの根本問題(1)

——『一族再会』・分析と解釈——

ホプキンス巡礼

山内邦臣
角倉康夫
川田周雄
山村武雄
増山学
大浦幸男
寺田建比古
岡田洋一
山村武雄
竹森修
大浦幸男
飯沼馨
大浦幸男
寺田建比古
山村武雄

第十集（昭和三十七年二月）

説得とドラマ——『ハムレット』第四幕第七場より——

ミルトンの失明をめぐる問題

『ジョナサン・ワイルド』の周辺(2)

アーノルドの古典主義(1)

オックスフォード拝見

鳴原真一

宮西光雄

飯沼馨

川田周雄

佐々部英男

第十一集（昭和三十七年三月）

呪われた運命

——『ハムレット』におけるモラルとアクション——

尾崎寄春

「詩的想像力」における根本問題序説(1)

——ロマンチズムを中心として——

アーノルドの古典主義(2)

「猿と本質」に就いて

フランク・ノリスの文学的本質

竹森修

川田周雄

中野正順

安藤昭一

第十二集（昭和三十七年九月）

ボウプと注釈

イエイツの劇

「怒れる若者たち」

『アナ・クリステイ』——その「舞台」と「背景」

について——

川田周雄

大浦幸男

竹森修

山内邦臣

第十三集（昭和三十八年三月）

コリンズの『雑題頌詩集』——擬人法と想像の問題——

アーノルドの古典主義(2)（続）

『キャスターブリッジの町長』——性格の悲劇——

William Golding and Jehovah

Dennis Keene

酒井幸三

川田周雄

岡田洋一

第十四集（昭和三十八年十一月）

『ハムレット』の悲劇性——その一面——岡田洋一

十九世紀の俳優たち——ひとつのプロローグ——高谷毅

人間把握の変貌

——シンクレア・ルイス『メイン・ストリート』——

より——

遁走と追跡

——『喪服はエレクトラによく似合う』序論——

イエイツ・カントリ・巡礼記

第十五集（昭和三十九年三月）

古代英詩における四季の概念

オースティンの『エマ』について

【遺稿】T・S・エリオットの方法

鳴原真一

山内邦臣

大浦幸男

山内邦臣

大浦幸男

佐々部英男

宮西光雄

高谷毅

——シンボジアム——

米英における英語教育

(司会) 中野正順

尾崎 寄 春・安藤 正一・大浦 幸男

第十六集 (昭和三十九年十月)

『ジョナサン・ワイルド』について(1)

『クラリッサ・ハローウ』の周辺

『ハイペリオン没落』序詩をめぐって

ボールの悲劇——『息子と恋人』

ヘンリー・ジェイムズの後期の文体

三つの女優物語

飯沼 照雄 馨
岡下 千吉
松村 透
奥村 久義
渡辺 久義
鳴原 真一

第十七集 (昭和四十年三月)

マローウとシェイクスピア

——『タンバレイン大帝』と『ヘンリー六世』

二部・三部——

『ジョナサン・ワイルド』について(2)

未知なる世界を求めて——『虹』

『波』覚え書

伝統とフィリップ・ラーキン

岡田 洋一
飯沼 馨
奥村 透
増山 学
喜志 哲雄

第十八集 (昭和四十年十一月)

シェイクスピアの『ヴィラン』(1)

——その近代性について——

尾崎 寄 春

スウィフトの『桶物語』——詭弁と否定のレトリック——

キーツとワーズワス

『闇の奥』(1)

イエイツの教智——イエイツ生誕百年を記念して——

I. A. Richards の価値論

On Putting Pen to Paper

James Crichton

第十九集 (昭和四十一年三月)

中世英詩における春の概念

ラムの『定年退職者』

『闇の奥』(2)

ウルフの最後の小説(1)

現代における創作の問題

——T. S. エリオットとジョイス——

『ジョヴァンニの部屋』について

——ジェイムズ・ボールドウィンの実験——

MT というもの

英語科教科教育法の問題点とその解決案

佐々部 英男
山崎 正雄
竹森 修
増山 学
渡辺 久義
酒井 健三
松木 泉
安藤 昭一

第二十集 (昭和四十二年三月)

シェイクスピアの『ヴィラン』(2)

——その近代性について——

尾崎 寄 春

ナッシュのソング「悪疫の時に」・私註
ドライデンの英雄劇 再考

松下千吉
山村武雄

『ウォルデン』にみられる東洋思想について

尾形敏彦

故名誉教授深瀬基寛先生を悼む

第二十一集（昭和四十二年八月）

「簡素によせる頌」注解

——コリンズにおける自然観の背景——

酒井幸三
長谷川年光

イエイツの劇的な精神をめぐって
ロレンス小説のひとつの意味

——「息子と恋人」から「恋する女たち」まで——

奥村透
角倉康夫

J・M・マリの文体論

第二十二集（昭和四十三年一月）

イルージョンとリアリティー——マードック私見

佐野哲郎

エマソンのユニテリアニズム批判について
ホーソーン『大理石の牧神像』における「幸運な墮落」

——その非宗教性について——

尾形敏彦
三宅卓雄
蜂谷昭雄

Alastor の意味

Insight as Answer
——A Note on D. H. Lawrence P. C. M. Gardner

第二十三集（昭和四十三年十月）

古英語における愛の一表現

ジョージ・エサリッジの第二作

『闇の奥』(3)

佐々部英男
喜志哲雄
竹森修

第二十四集（昭和四十四年三月）

OE Freond について

『闇の奥』(4)

ソーロウのジョン・ブラウン弁護について

ドス・パソスと第一次大戦

——「三人の兵士」と「一九一九年」をめぐって——

田中礼

第二十五集（昭和四十五年三月）

『マクベス』——存在と時間——

ドライデンの一つの見方——叙事詩と諷刺詩との関係——

岡田洋一
山村武雄

‘Glee’・「飲び（の歌）」という言葉の復活について（その一）

——ブレイクの『無垢の歌』の場合——

松下千吉

エスマンの『神学部講演』にたいするブラウンスンの

批判について

——『神学部講演』はこの批判にたえられるか——

尾形敏彦

The Novelist's Predicament Today John Noone

第二十六集（昭和四十五年十二月）

『ジョン王』における庶子の性格と便宜主義の主題

青木 啓治

‘Glee’・「歓び（の歌）」と「言葉」の

復活について（その二）

——ワーズワスの『一八〇七年詩集』を中心に——

松下 千吉

ウルフの最後の小説②

『ウォルデン』の中心思想

増山 学

Some Syntactic Innovations in the Final Part of

The Peterborough Chronicle

尾形 敏彦

第二十七集（昭和四十六年三月）

OE *Apollonius of Tyre*

佐々部 英男

『間違』の喜劇

——『メナエクス兄弟』『アムビトルオ』

との比較——

小 畠 啓 邦

ポー・前期の技法①——アレゴリーとその周辺——

酒 井 幸 三

ピンターの形式感覚

嶋 原 真 一

第二十八集（昭和四十七年一月）

外なるものから内なるものへ——イエイツの民衆観——

佐野 哲郎

記憶と創造

——ヘンリー・ジェイムズの後世に及ぼす意味——

渡辺 久義

エマスンとその群①

——ラルフ・ウォルド・エマスン——尾形 敏彦

英語において知覚と情動を表わす語の起源について

永野 芳郎

第二十九集（昭和四十七年三月）

決疑論者B夫人——『パミラ』第二部について——

山 本 利 治

歓びの静謐と生動——ワーズワスからクレアへ

——‘Glee’・「歓び（の歌）」という言葉の復活について

（その三・結びとして）——

三つの船

松下 千吉

疎外論より見たドライサー

安藤 昭 一

第三十集（昭和四十八年三月）

『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』を結ぶもの

——ハルの英雄的性格と太陽と雲の主題——

青 木 啓 治

オセロウ——アイデンティティをめぐる——

岡 田 洋 一

肉体の復活——『チャタリー夫人の恋人』——

奥 村 透

エマスの詩『バックス』について 尾形敏彦
ライトの『アウトサイダー』——人種性と普遍性——

The Language of *Emare*, A Middle English Romance
Part I. Phonology 田中 礼
永野芳郎

第三十一集（昭和四十八年十二月）

Anticipation of Experience

——ダンとパラケルサス、結—— 桜井正一郎

ロレンスのリーダーシップ・ノヴェルズについて

——『エアロンの杖』から『翼ある蛇』まで——

ウォーレス・スチーヴンズの世界 奥村 透
——“Notes toward a Supreme Fiction”について——

The Owl and the Nightingale の英語 大浦 幸男
佐々部 英男

第三十二集（昭和四十九年三月）

恣意の空間と摂理の空間（その一）

——『リア王』の浜セリ探り・覚え書き——

エマスの詩について——序説—— 松下千吉
尾形敏彦
固き世に投入られた優しさ

——ホーソン短篇論(1)「優しき少年」——

三宅 卓雄

Marvell の ‘*Ros*’ と ‘*On a Drop of Dew*’ 蜂谷 昭雄

第三十三集（昭和五十年二月）

『批評論』注解(一) 酒井 幸三

混沌の夜への眼差し

——『親戚モリヌー少佐』のディスクリール——

(ホーソン短篇論2) 三宅 卓雄

『ジークル博士とハイド氏』解釈(1) 竹 森 修

へミングウェイの中国ルポ 嶋 原 真 一

第三十四集（昭和五十年十二月）

『アントニーとクレオパトラ』——リアリティの問題——

岡田 洋 一

悪夢と日常への眼差し

——『若者グッドマン・ブラウン』のディスクリール——

(ホーソン短篇論3) 三宅 卓雄

『緑樹の陰で』について 増 山 学

『ジークル博士とハイド氏』解釈(2) 竹 森 修

アーヴィング・バビットのジュベール論 角 倉 康 夫

第三十五集（昭和五十一年三月）

続・エマスの詩について——序説—— 尾形敏彦

『ジークル博士とハイド氏』解釈(3) 竹 森 修

フェノロサリパウンドによる

謡曲『錦木』の英訳をめぐる 長谷川 年 光

第三十六集（昭和五十一年十二月）

十八世紀とシェイクスピアの喜劇

——女性登場人物の批評に関する覚え書——

小 島 啓 邦
奥 村 透
エミリー・ブロンテの詩の世界
桜 井 正 一 郎

イエイツの「悲劇のなかの喜悅」

「めりけんアレルギー」
鳴 原 真 一

伝統の新しい擁護——Margaret Drabbleの文体(1)——
豊 田 昌 倫

第三十七集（昭和五十二年三月）

デアドラの物語——アイルランド伝説の側面——

佐 野 哲 郎

文学と文化の間（序論）

——ヘンリー・ジェイムズにおける言語の意味——

渡 辺 久 義

トリストロの謎を生むもの

——トマス・パンチョンの *The Crying of Lot 49*

について——
中 村 絃 一

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——ブルタルコスを中心に——（Ⅰ）

『ジュリアス・シーザー論』（その一）
木 村 輝 平

18世紀イギリスにおける小説批評（Ⅱ）
山 本 利 治

The Translation of a Hero
David Hale

第三十八集（昭和五十二年十二月）

結句有情——ワイアットからシェイクスピアへ——

桜 井 正 一 郎
尾 形 敏 彦
エマソン『自然論』

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——ブルタルコスを中心に——（Ⅱ）

『ジュリアス・シーザー』論（その二）

木 村 輝 平

第三十九集（昭和五十三年三月）

シェイクスピアの史劇におけるアイロニーについて

——主題と性格の問題——

青 木 啓 治
ホイットマンにおける性の表現
田 中 礼

『非常手段』覚え書
増 山 学

シェリーとピンダロス

——「エウガネイ連山」をめぐる——

蜂 谷 昭 雄

第四十集（昭和五十四年一月）

Beowulf における酒宴のたのしみ

キーツの死の諸相
佐 々 部 英 男

『マンズイの子マース』対訳
蜂 谷 昭 雄

——

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プタルコスを中心に——(Ⅲ)

『ジュリアス・シーザー』論(その三)

木村輝平

ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵

フェノロサ資料(一)序

村形明子

Theories Behind Language Acquisition Theories

David Sell

第四十一集(昭和五十四年三月)

恣意の空間と摂理の空間(その二)

——『序曲』(第一巻)の鳥の巢掠りの少年・

覚え書き(一)——

松下千吉

エマソンの『英国人の特性』

——愛国者エマソンの一面——

小畠啓邦

戯れの言葉

——メルヴィルの「独身男達の天国と

乙女達の地獄」について——

中村紘一

T・S・エリオットとアーヴィング・バビット

角倉康夫

ジェフリー・オヴ・マンマス『メルリーヌス伝』(訳)(1)

六反田収

フェノロサの『文学真説』

——ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵

遺稿(Ⅱ)——

村形明子

第四十二集(昭和五十五年二月)

恣意の空間と摂理の空間(その三)

——『序曲』(第一巻)の鳥の巢掠りの少年・

覚え書き(二)——

松下千吉

イエイツにおける「力への意志」

——劇『カルヴァリー』について——

渡辺久義

中期英語における印欧系語詞の廃用について

永野芳郎

Years and the Noh: The Supernatural in Drama

長谷川年光

第四十三集(昭和五十五年八月)

シェイクスピアの『リチャード二世』再考

——王の没落と「詩人的性格」について——

青木啓治

"All Wars are Boyish"

——メルヴィルの四つの戦争詩——

中村紘一

ジェフリー・オヴ・マンマス『メルリーヌス伝』(訳)(2)

六反田収

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プタルコスを中心に——(Ⅳ)

『アントニーとクレオパトラ』論(その二)

アントニウスとクレオパトラの恋

木村輝平

フェノロサの京都社寺什宝調査メモ

——ハーヴァード大学ホートン・ライブラー蔵

遺稿(Ⅲ)——

村形明子

第四十四集(昭和五十五年十一月)

イエイツにおける苦悩への意志、その宗教性の構造

——劇『煉獄』をめぐる——

渡辺久義

Commentarii Eynologica (I)

——擬音語と鳥の名称——

永野芳郎

On Word Meaning

David Sell

第四十五集(昭和五十六年十月)

詩の進歩と進歩の詩

蜂谷昭雄

底無しを中心から——シェイマス・ヒーニーのボググ詩——

佐野哲郎

回想の楽園を求めて——メルヴィルの『オム』覚書——

中村絃一

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プタルコスを中心に——(Ⅴ)

『アントニーとクレオパトラ』論(その二)

アントニウスとクレオパトラの恋(続)

木村輝平

コウルリッジの『失意のオウド』

藪下卓郎

第四十六集(昭和五十七年三月)

『オールメイヤーの阿房宮』について 奥村透

イエイツにおける詩と政治、あるいは孤独と集団

渡辺久義

メルヴィル『マーディ』のための一つの覚書

——その「語り手」といわゆる「逸脱」の章について——

中村絃一

『タイニー・アリス』の構造

宮内真弘

文体論再考

第四十七集(昭和五十七年十月)

考える人——エマスの『アメリカの学者』——

尾形敏彦

西行の歌「くもり無き山にて……」解釈

竹森修

メルヴィル『レッドバートン』の語り手について

——『マーディ』との関連におつて——

中村絃一

Some Poems on the Poet and His Problems

David Hale

Ernest F. Fenollosa's "Notes for a History of the Influence

of China upon the Western World": a Link between

the Houghton and the Beinecke Library Manuscripts

村形明子

第四十八集（昭和五十八年三月）

さまざまな語り口

——メルヴィル『ホワイト・ジャケット』覚書——

中村 絃 一

恣意の空間と摂理の空間（その四）

——『序曲』（第一巻）の鳥の巣掠りの少年・

覚え書き(三)——

松下 千 吉

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プタルコスを中心に（Ⅵ）——

『アントニーとクレオパトラ』論（その三）

アエノバルブス、ポンペイウス、レピドウス

木村 輝 平

第四十九集（昭和五十八年十二月）

ジェイン・オースティンにおけるジェントルマン（Ⅰ）

山 本 利 治

ロマン派における〈未完〉の問題（その一）

——コウルリッジ・会話詩群を中心に——

藪 下 卓 郎

Melville and His "Two Books"

福 岡 和 子

『美術真説』とフェノロサ遺稿

村 形 明 子

編集後記

☆『英文学評論』が五十集に達した。ここに、古代・中世英語から、英・米文学、そしてまた比較文学にまでおよぶ多彩な論文十五篇を集めて、記念号を上梓することができたのは、編集子の大きなよろこびとするところである。執筆、協力下さった諸方に厚く謝意を表したい。さらに、第一集から第四十九集までの総目次を附したのは、教養部英語教室の研究の歴史をしのぶよすがとしてだけでなく、更に発展のためになればとの願いからである。ところで、『英文学評論』の題字は、故深瀬基寛先生の筆になるものであることをここに明記しておきたい。

☆教室事情。四月には山本利治氏が教授に昇任された。また、九月には中村紘一助教授が一年間のハーヴァードでの留学から、一月には嶋原真一教授が十ヶ月間の文部省在外研究員としての留学から、それぞれ帰国された。

☆談話会については、まず十月四日に、中村紘一助教授の「私の見たハーヴァード」と、水光雅則助教授のレディング大学における英語研修の報告を、さらに一月三十一日には、嶋原真一教授の「アメリカの芝居、イギリスの芝居」を、それぞれ興味深く聴くことができた。

(T・H)

英文学評論 第五十集

非 売 品

昭和六十年三月八日 印刷
昭和六十年三月十五日 発行

編集者 京都大学教養部英語教室

代表者 奥村 透

印刷所 中西印刷株式会社

京都市上京区下立売通小川東入

発行者 京都大学教養部英語教室

京都市左京区吉田二本松町

50TH Special Edition

REVIEW OF ENGLISH LITERATURE

Volume L March 1985

CONTENTS

An Essay on <i>and</i>	<i>Hideo Sasabe</i>
Repetition and Parataxis in Chaucer	<i>Osamu Rokutanda</i>
How <i>Hamlet</i> Begins	<i>Yukio Kato</i>
An Afterthought to <i>The Tempest</i>	<i>Shoichiro Sakurai</i>
<i>Il Penseroso</i> and Shakespearean Tragedy	<i>Kozo Sakai</i>
Space of Self-Will and Space of Providence (V)	<i>Senkichi Matsushita</i>
An Elegy for Parnell : Yeats and 1848	<i>Tetsuro Sano</i>
The Structure of <i>The Only Jealousy of Emer</i>	<i>Toshimitsu Hasegawa</i>
The Structure of <i>The Room</i>	<i>Yoshimaru Yoda</i>
The Liverpool Chapters in <i>Redburn</i>	<i>Kazuko Fukuoka</i>
<i>Mourning Becomes Electra</i> and the Drama of Life and Death Impulses	<i>Hirokuni Kobatake</i>
An Explication of Wallace Stevens' "Final Soliloquy of the Interior Paramour"	<i>Hisayoshi Watanabe</i>
Roman Historic Figures and Shakespeare (VII)	<i>Teruhira Kimura</i>
A Brave New World After All?	<i>David Hale</i>
Ezra Pound ed. "Fenollosa on the Noh" as It was	<i>Akiko Murakata</i>
A List of Contents, Vols. 1-49	

ENGLISH DEPARTMENT
COLLEGE OF LIBERAL ARTS
KYOTO UNIVERSITY